

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

—松本光太郎先生との調査旅行の備忘録—

木 村 自

はじめに

本稿は、私と松本光太郎先生が中国雲南省で一緒に行った調査旅行の記録であり、記憶である。私と松本光太郎先生とは、2006年12月25日から2007年1月1日までの短期間、滇西（雲南省西部）と滇中（雲南省中部）の複数の地域のモスクを回り、回族（中国ムスリム）の宗教指導者や古老に話を聞いた。私はもともと台湾やミャンマーに居住している雲南系の中国ムスリム（以下雲南ムスリム）を研究の対象にしていたものの、中国雲南省には足を踏み入れたことがなく、機会があれば、台湾やミャンマーにおいて私が調査の対象としている調査協力者たちの、雲南省における原籍地を訪れたいと思っていた。そんな私を雲南に導いてくれたのは、松本光太郎先生である。

フィールドワークと呼ぶにはあまりに短期間で、怒濤のように駆け抜けた調査であり、むしろ旅行と呼ぶ方がふさわしいかも知れない。この短い日程で行った調査旅行の記録は、その一部を除いて、その後私は書き起こすことも、まとめることもせず、ただメモ書きのフィールドノートの本棚に置いたままにしていただけであった。それからすでに3年の年月が経ってしまっており、今フィールドノートを読み直しながら整理するにも、すでに記憶の断片を組み合わせるような状態で、記憶を十分な記録として残し得るのかどうか、かなり心もとない。本稿においてフィールドノートを整理し直し、調査の記憶をたどり、遅ればせながら松本光太郎先生と短期間ながら行った調査旅行を記録し、記憶に残しておきたいと思う。だから、本稿はいわば備忘録である。

私たちが行った調査旅行で、松本光太郎先生が何を理解しようとしていたのか、はっきりとしたことは私には分からない。私自身は、雲南ムスリムのネットワークが、ミャンマーと中国雲南省との間の親族的・宗教的つながりを通して、いかに構築され強化されているのかを知りたいと思っていた。そのため、中国とミャンマーの国境地帯の都市や、ミャンマーや台湾に住んでいる雲南ムスリムの原籍地、親族関係をたどろうとした。松本光太郎先生も、どうもタイで出会ったある雲南ムスリムの故郷を辿って、その人物の生い立ちを紡ぎ直したいと思っていたようである。私と同様、国境を越える人々のつながりに着目していた。

松本光太郎先生が回族（中国ムスリム、雲南ムスリム、華僑ムスリム）について書いた論

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

考には、民族的・国家的境界やそうした境界を跨ぐ人々が多く出現する。そうした境界を跨ぐこと、あるいは少なくともそうした境界によって生じるずれに自覚的に対面しようとする人々が、松本光太郎先生の論考ではしばしば暗示的な主題になっているように、私には感じる。民族の境界を、宗教の境界を、国境を、国家を越える人や物、情報は、どのような越境空間を紡ぎだしているのだろうか。本稿では、私と松本光太郎先生とが一緒に行った調査旅行の記憶と記録をとおして、中国と周辺諸地域（上ミャンマーや北タイなど）とのあいだで生じているイスラームをとおした相互作用を紹介したいと思う。

1 回族研究と松本光太郎先生

1.1 回族と呼ばれる人々

それでは回族とはいったい誰か。あるいは、中国ムスリム、雲南ムスリム、華僑ムスリムは何を指しているのか。最初に、回族とそれに関連した語彙について、簡単に解説しておきたい。

今日の中華人民共和国において、イスラームを信仰し（信仰してないものもいるが）、一般に漢語を話し、祖先が中近東やペルシア、中央アジアから中国に移住してきたという伝承を共有する人々は、「回族」という少数民族として認定されている。しかし、歴史的には「回」はイスラーム教徒一般を指示するために用いられた語で、民族としてよりは宗教集団として考えられていた。今日のように固定された民族として認識されるようになったのは中国共産党の民族政策によって、民族が固定化されて以降である。よって、たとえば台湾では中国とは異なる民族政策が採用されていたため、台湾に居住する中国ムスリムには、回族という少数民族アイデンティティは存在せず、彼らは自分自身を「イスラームを信仰する漢族」であると認識している¹⁾。

ところで、今日の中華人民共和国で「回族」と称されるこれらの中国ムスリムのなかには、中国を離れ、中央アジアや東南アジアへ移住したものも少なくない。彼ら中国ムスリム移民は、移住先の地域においてエスニックな存在として位置づけられ、それぞれ特殊な名称で呼ばれてきた。海外に移住した中国ムスリムのうち、雲南から東南アジア諸国や台湾へ移住した人々も独自の歴史的・文化的背景を有している。雲南省からタイやミャンマーへの移住は明朝期には始まっていたとされているが、東南アジアへの移住が史料として確実視されているのは19世紀後半に雲南省で起こった杜文秀起義とそれに対する清朝政府の弾圧に始まる。こうした特殊な歴史的・文化的背景を有している雲南ムスリムたちは、移住した各地で様々な呼称で呼ばれてきた。タイにおいては「ホー」もしくは「チン・ホー」と呼ばれる。ミャンマーにおいて「パンデー」と呼ばれる人々は、雲南からミャンマーに移住した中国系のムスリムのことを指す。

本稿では中国の公定少数民族名称である「回族」に加えて、「中国ムスリム」「雲南ムスリム」「華僑ムスリム」などの呼称を用いたい。「回族」とは中国共産党の民族政策が始まって以降の中国系のムスリムを意味しており、「中国ムスリム」とは、中華人民共和国・東南アジア・中央アジア・台湾など民族政策を問わず、自分や祖先の出自が中国にあると考えており、漢語を基本的に話す中国系のムスリムを総称する場合に用いる。また、「雲南ムスリム」はそうした中国ムスリムのうち、雲南省を原籍地とする人々を指し、さらに「華僑ムスリム」とは雲南ムスリムのうちタイ・ミャンマーなどに居住する人々、および居住した経験のある人々を指す。

1.2 松本光太郎先生と回族研究

さて、松本光太郎先生は、おそらく1990年代後半ごろから、回族・中国ムスリムの研究に力を入れられていたようである。1990年代後半に執筆された論考(1997)には、「雲南回族の研究を始めたばかりである」と記述されている。松本光太郎先生は、イスラームを儒教の言葉で語ろうとした「回儒」と呼ばれる人々の研究や、雲南省の回族、さらにはタイ・ミャンマーに移住した華僑ムスリム移民などを、研究の主題とするようになっていた。

松本光太郎先生が回族、中国ムスリムについて書いた論考は、必ずしも明示的に論じられている訳ではないとしても、いずれも何らかのかたちで「境界」に関連しているように思う。初期の論考(1997)では、回族に対する漢族の恐怖イメージの歴史的根拠を議論し、漢族と回族との境界域におけるコミュニケーションがテーマとなっている。また、雲南省の彝回について論じた近年の論考(2007)は、漢族と回族、あるいは回族と彝族との間において、相互作用を経て、食文化などの文化変容が生じ、ハイブリッドな回族アイデンティティが創出されていることを論じている。これらは民族の境界であり、民族境界を越える回族のコミュニケーションのあり方である。

他方、タイ北部やミャンマーにおける雲南ムスリムの歴史動態と現況を描いた論考(2001, 2002b)は、中国ムスリムの移住や移動に伴う、文化変容の二つの方向を論じている。つまり、中国ムスリムが国境や境界を越えた移動という歴史的動向のなかで、一方でタイ文化なりビルマ文化なりとの間で、いかに調和的なコミュニケーションのあり方を形作るかという側面であり、他方で雲南省籍の中国ムスリム同士が、国家を越えてより緊密に結びつくという側面である。さらに、イスラームを儒教と漢字の文化圏に融合させようとしてきた「回儒」たちは、まさに文化のインターフェイスにおける文化変容のもっとも典型的な事例である。この「回儒」についても、松本光太郎先生は論考を残している(2002a)。

もちろん、境界は文化、国、宗教、民族などを明確に分かつ所与のものとして存在しているのではなく、もとより多様な接触の過程を通してはじめて明示的に現出するものである。よって境界上には実際には相互に排他的な分割線が存在するわけではなく、逆に不安定で、

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

曖昧模糊とした空間が広がっている。こうした境界をめぐる議論が、松本光太郎先生の論考の背後には問題系として存在しているように思われる。よって、本稿では回族とその「境界」というテーマを補助線として、私と松本光太郎先生との調査旅行記を記してみたいと思う。

2 境界域のムスリムたち

——中国と周辺諸国を結ぶムスリムのトランスナショナリズム

以下が本稿の中心をなすフィールドノートの整理である。松本光太郎先生は2005年度から2007年度にかけて、科学研究費補助金による研究プロジェクト「中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究」の代表者をされていた。このプロジェクトによる調査の一環として、松本光太郎先生と私は、2006年12月25日から2007年1月1日まで（木村単独の調査はその後1月7日まで大理近郊の巍山で続けた）、滇西（雲南省西部）と滇南（雲南省南部）を中心に駆け足の調査旅行を行った。当時の調査旅行ルートの概要を、簡単に紹介しておこう（地図も参照されたい）。

2006年12月26日：滇西・保山のモスクを見学した後、夜に騰沖に到着する。

2006年12月27日：騰沖県城内のモスクおよび近郊村落の馬家寨で聞き取り調査を行う。



雲南省地図

2006年12月28日：午前中に騰冲県城郊外のモスクを二つ見学し、夕刻に瑞麗に着く。
 2006年12月29日：隴川県の老馬寨モスク、畹町のモスク、瑞麗のモスクで調査をする。
 2006年12月30日：午前中に瑞麗を出発し、飛行機で昆明に着き、そのまま車で沙甸に。
 2006年12月31日：沙甸で断食明けの祭を見学する。
 2007年1月1日：午前中に玉溪のモスクを訪問し、その後松本光太郎先生は昆明の空港から帰国する。

私にとっては初めての雲南省での調査であったし、上記日程のごとくあわただしく調査地を駆け巡るだけで精いっぱいであったので、この調査旅行を通して論文へと昇華させ得るだけのデータを取得しえたとは言い難い。ただ、私たちが雲南回族の境界や越境を考えるヒントは、駆け足の旅行調査においてもちりばめられていたように思う。

ここで「境界」とは国境であり、民族や国籍の差である。国境とは中国雲南省と上ミャンマー（ミャンマー北部）、あるいは中国雲南省と北タイのあいだにある具体的な領土上の境界のことであり、人々や物資、資本、情報はその境界を越えて頻繁に往来している。他方、民族や国籍の差とは、華僑系ミャンマー人ムスリム（ミャンマーの華僑ムスリム）と雲南の回族、あるいは非華僑系（とくにインド系）ミャンマー人ムスリムと雲南省の回族との間の境界である。とくに瑞麗などの国境地域においては、ミャンマー人コミュニティの存在が特徴的であった。ムスリムの場合、ミャンマー人も中国人も同じモスクで宗教活動を行うが、その際一部の活動は協力して行われ、他の一部は別個に宗教活動を行っていたりする。調査旅行で知り合った人々は、こうした境界を時にやすやすと越え、時に自他の差異を強化しながら生活している。境界とは単なる線分ではなく、そこで相互作用が生じる場である。本稿は、こうした相互作用が生じる境界面を、調査旅行のフィールドノートをもとに整理し直す。とくに、大陸部東南アジアの華僑ムスリム（雲南省からミャンマー、タイに移住した中国ムスリム）と雲南回族との境界面、中国側国境都市に居住する非華僑系のミャンマー人ムスリムと回族との境界面の両者に分けて記述してみたい。

2.1 華僑ムスリムとイスラームをめぐるトランスナショナリティ

先述のように、大陸部東南アジア諸国、とくにミャンマーとタイには、雲南省から中国ムスリムが数多く移住した。19世紀後半に雲南省で起こった回族に対する大量虐殺、雲南省と北タイ・上ミャンマー間での交易、それに1949年以降の中国共産党による雲南省の「解放」などに起因して、大陸部東南アジアへ中国ムスリムは移住していった。移住先の国々において「華僑」を自称する彼ら中国ムスリムたちは、今日でも雲南省の親族集団やモスク・コミュニティと、国境や国籍を越えて密接な関係を維持している。国境を越えて維持される中国ムスリムのネットワークを、調査旅行における聞き取り調査の記録から整理し直してみ

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

たい。

①海外から雲南省各モスクへの資金の流入

西暦2006年の12月は、ちょうどイスラーム暦の巡礼月に当たっていた。12月31日が犠牲祭であったため、各モスクにおいては犠牲祭のために喜捨を行った人々のリストが貼り出されていた。喜捨者リストに記載されている人々の名前は多くが各モスクを中心としたコミュニティの回族であるものの、中には一部海外に居住している華僑ムスリムによる喜捨者が含まれている。それらはタイ、ビルマ、台湾などの国であり、雲南ムスリムの海外移住のルートを示している。たとえば雲南省騰冲県城内にある観音塘モスクの喜捨者一覧には台湾に居住する中国ムスリム（台湾教胞）とタイに居住する中国ムスリム（泰国教胞）から資金援助があったことが明示されている（写真1）。これらの海外からの喜捨者は、本人もしくは本人の両親などが、喜捨を行ったモスクにかつて所属していたことによる。他方、モスクの修復や建設に際して多額の寄付をした事例も見られる。

②経堂教育における「^{ハイフンダ}海旺徳」としての海外からの学生支援

中国におけるイスラーム教育は、歴史的に「経堂教育」というかたちで行われてきた。経堂教育とは明朝期に確立された中国のイスラーム教育制度で、各モスクの宗教指導者（中国語では^{アホン}阿訇）が、各モスクにおいて行う寄宿制のイスラーム教育を指す。各モスクにおいて経堂教育を施すための資金の出所は、おもに各モスクに所属するムスリムたちの喜捨によるところが大きい。

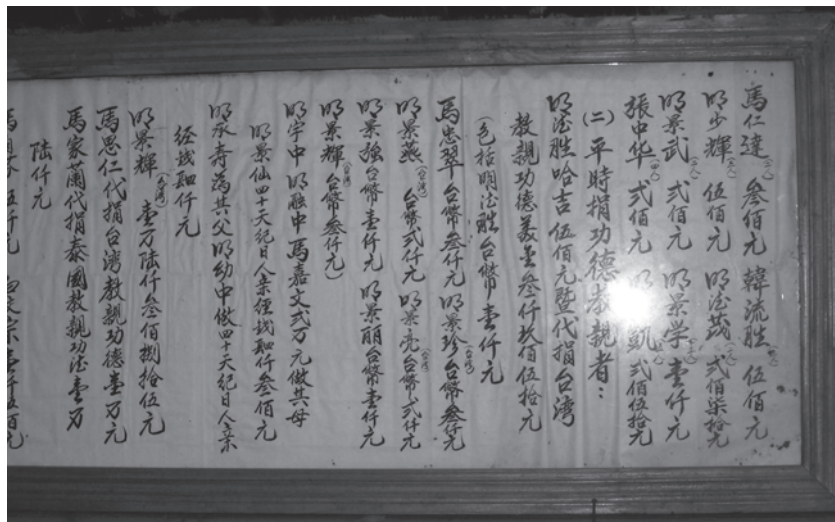


写真1 観音塘モスクの寄進者一覧には台湾やタイの中国ムスリムの名前が見られる。

雲南省でも各モスクにおいて経堂教育が行われてきた。雲南省において経堂教育を支える資金源は主に三つある。一つはワクフ資産（中国語では「寺産」）で、モスクに隣接した土地からの収益や、近くの池を貸借して得た収益などの一部が、経堂教育の資金源として充当される。二つ目が各モスクに所属するムスリムからの喜捨である。三つ目に、「海旺徳」と呼ばれる制度があり、この制度のもとで各モスクに学ぶ学生たちに直接的に食費や勉学のための費用が支払われる。「海旺徳」制度は、おそらく雲南省の経堂教育におけるもっとも特徴的な制度の一つである。「海旺徳」とは経堂教育を受ける期間中、「蠟燭代（勉強に必要な文房具を買う資金など）」と食費とを、ある特定の個人に対して提供する人物、およびその制度を指す。詳細は拙稿（2009b）を参照されたいが、ある「海旺徳」は一人もしくは複数の学生に直接的に資金を提供し（提供された資金の管理は各モスクが行うのだが）、「海旺徳」と学生の間には家族のような人間関係が生まれて、その関係はときに一生涯継続される。

ワクフ資産とムスリムからの財源が、各モスクを単位とした「教坊（檀家のようなもの）」コミュニティを単位としたものであるのに対して、「海旺徳」のみは各モスク・コミュニティの枠をはるかに越え、県や州の境界はもちろんのこと、なかには国境を越えて「海旺徳」関係が構築されることもある。その一つの事例が、私たちが騰沖で遭遇した経堂教育イスラーム学生の事例である。

私と松本光太郎先生が騰沖についた翌日、私たちは騰沖県城内にある東門モスクを訪問し、そこで私たちの調査に付き添ってくれる沙玉伝氏に会った。沙玉伝氏は東門モスクで経堂教育を受けている、当時22歳のイスラーム学生であった。私たちは馬家寨の村落とモスクを訪問する予定にしており、現在騰沖県城内にいる沙玉伝氏がかつとも馬家寨のモスクで経堂教育を受けていた経験があったためである²⁾。馬家寨での聞き取り調査の中心は、現在タイに居住している馬劍波という人物のルーツを探ることにあつた。馬劍波氏は松本光太郎先生がタイでお世話になっている華僑ムスリムの資産家で、中国のムスリム社会への経済面での援助が大きいと聞いていたからである。馬劍波氏は中国雲南省馬家寨に生まれ、中国で文化大革命を経験した後、1971年に北タイへ移住した（写真2）。

馬劍波氏はタイにおいて経済的に成功した後、馬家寨のモスクなどへの経済的支援を始め、雲南各地でイスラームの復興に貢献している。そうした貢献のうちの一つが、雲南のイスラーム学生の「海旺徳」として経済的な支援を行うことである。私たちの調査に付き添った沙玉伝氏の「海旺徳」も馬劍波氏であり、沙玉伝氏が経堂教育を受ける期間に必要な一切の経済的支援を行っていた。

③ 畹町モスクとビルマ華僑ムスリムと中国回族とのネットワーク

1949年の解放前、畹町には回族は居住していなかった。2006年12月現在、畹町には27戸、71人の回族が居住している。解放後しばらくして、大理や昆明、騰沖などから回族が畹町



写真2 馬家寨でタイ華僑ムスリムの馬剣波氏の親族。

に移り住んできた。近年になって畹町に回族が流入してきたため、畹町にはこれまでモスクが存在していなかった。そのため、現在モスクを建設中であり、2006年末の時点でほぼ完成に近い状態であった。調査時点でモスクが建設されていた土地は、元来別の会社が所有していた土地であった。その土地を政府が没収し、それが競売にかけられたので、畹町の回族が23万元（2010年11月現在のレートでは約280万円）で買い取った。モスクが建設されたとは言うものの、この畹町モスクは政府から「モスク」としての認可を受けているわけではない。よって、正式には「畹町イスラム服務站」という名称が使用されている。

さて、この畹町モスクの建立に際しても、先の馬剣波氏が関係している。畹町モスク建設に対して建設資金を寄付した人物として碑（功德碑）が作成されており、そこに馬剣波氏の名前が見える。「タイに居住する著名な愛国的華僑の指導者でイスラーム教同胞の馬剣波氏は、人民元2万元……を寄付した」（写真3）。畹町においても、中国国内のイスラームの動向が、海外に居住している華僑ムスリムによって維持されていることが看取できよう。

ところで、私たちが畹町のモスクに着いた時、そこにたまたまいた回族の男性に話を聞いた。その男性はつい最近石狗頭というところから帰ってきたばかりだという。何をしていたのかというと、騰冲籍のミャンマー華僑ムスリムで、17～18歳の少女を、滇中（雲南省中部）玉溪の石狗頭にあるイスラーム女学校に送り届けて帰ってきたところだという。同氏が言うには、ミャンマーは教育の面で遅れており、大理近郊の回族が彼女たちを中国で仕事させるために、このアラビア語学校を紹介して入学させた。イスラーム教育をめぐる越境が、ごく



写真3 暹町モスクの寄進者碑(功德碑)。タイ華僑の馬劍波氏の名前が見られる。

自然に行われている。

2.2 非華僑系のミャンマー人ムスリムと回族

大陸部東南アジアの華僑ムスリム移民と中国雲南省の回族との間には、このように親族関係やモスク・コミュニティを中心とした密接な関係が存在している。他方、非華僑系のミャンマー人ムスリムと中国雲南省の回族の間には、より複雑な関係があるように見える。近年、ミャンマーと中国との交易が急速に増加しており、ミャンマーの市場では中国製品が溢れかえっている。また、ミャンマーとの国境に隣接する中国の中小都市には、数多くのミャンマー人が滞在(居住か)しており、ミャンマー人と中国人とは否応なく接触せざるを得ない。ムスリムたちも同様で、とくに以前回族がほとんど居住していなかった中国の国境都市には、回族よりもミャンマー人ムスリム(多くがインド系と思われる)が数多く居住してかのようなのである。ミャンマー人ムスリム、あるいは海外のムスリムたちと雲南回族との関係を、私たちの調査旅行で知り得た限り記録しておきたい。

①瑞麗モスク³⁾に集まるミャンマー人ムスリム

瑞麗には数多くのミャンマー人ムスリムが生活している。2006年12月29日に瑞麗のモスクを見学した私たちは、インド系ミャンマー人ムスリムの人数の多さに驚いた。ミャンマー人ムスリム人口の規模が大きいことは、モスク内部の随所に記述されたビルマ語の記述に

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

よっても知ることができる。

そもそも、瑞麗モスクの入り口には、中国語ではなくビルマ語で「シュエリー・バリ（「シュエリー」は「瑞麗」の意味で、「バリ」はモスクの意味）」と書かれている（写真4）。また、ちょうど古爾邦節（犠牲祭）が近いこともあって、瑞麗のモスク内部に古爾邦節に関する様々な案内が提示してあったが、なかでもビルマ語表記のものが目に付いた。たとえば、瑞麗モスク内部にあった黒板には、上段に中国語で、下段にビルマ語で犠牲節（古爾邦節）の開催日時を知らせていた（写真5）。また、犠牲節の集団礼拝の時間をビルマ語のみで告知している黒板も見られる（写真6）。

瑞麗モスクにおける回族とミャンマー人ムスリムとの関係について、同モスクの阿訇^{アホン}は次のように話していた。

開齋節（断食明けの祭り）と古爾邦節（犠牲祭）は、中国人ムスリムとミャンマー人ムスリムとは一緒に礼拝を行うが、聖紀（預言者ムハンマドの記念祭）は、中国人ムスリムとミャンマー人ムスリムとの習慣が違うので別々に行う。聖紀は中国人が1日目に行い、ミャンマー人は2日目に行う。たとえば、祝祭における中国人ムスリムの食卓には、8～10種類もの料理が並ぶが、ミャンマー人ムスリムたちは一種類のみである。言語上の問題もあり、ミャンマー人ムスリムと中国人ムスリムとは、様々な活動を別々に行っている。ミャンマー人ムスリムたちの間では、誰か教長を決めて活動を行っているようだが、中国政府が認めているのは中国人の管理組織のみであって、中国人が中心だ。ミャンマー人は永遠に客人なのだ。

瑞麗のモスクには多くのビルマ系ムスリムが礼拝に訪れる。おそらくは中国人の回族よりもミャンマー人ムスリムの人口数の方が多いと思われる。瑞麗モスク自体は中国人の管理組織（董事会）によって運営されているものの、モスク内には随所にビルマ語による表示が見られ、ミャンマー人ムスリムの人口数の大きさを示している。ところが、宗教活動については、必ずしも回族とビルマ系ムスリムとが十全な協力関係のなかで宗教実践を行っているわけではないことが明らかになった。

②老馬寨における中国におけるミャンマー人のダアワ運動

12月28日には騰冲から瑞麗に向かう途中にある老馬寨という回族村落を訪問した。老馬寨は山道を40分ほど車で登って初めて辿りつくような孤立した、非常に貧しい回族村落である。老馬寨モスクでは馬小軍教長が私たちを迎えてくれた。馬小軍教長は甘肅省張家川出身の回族で、2006年5月1日に老馬寨モスクに着任したばかりであった。甘肅省張家川で2年間経堂教育を受けた後、雲南省昭通のモスクの中阿学校（アラビア語学校）で4年間学ん

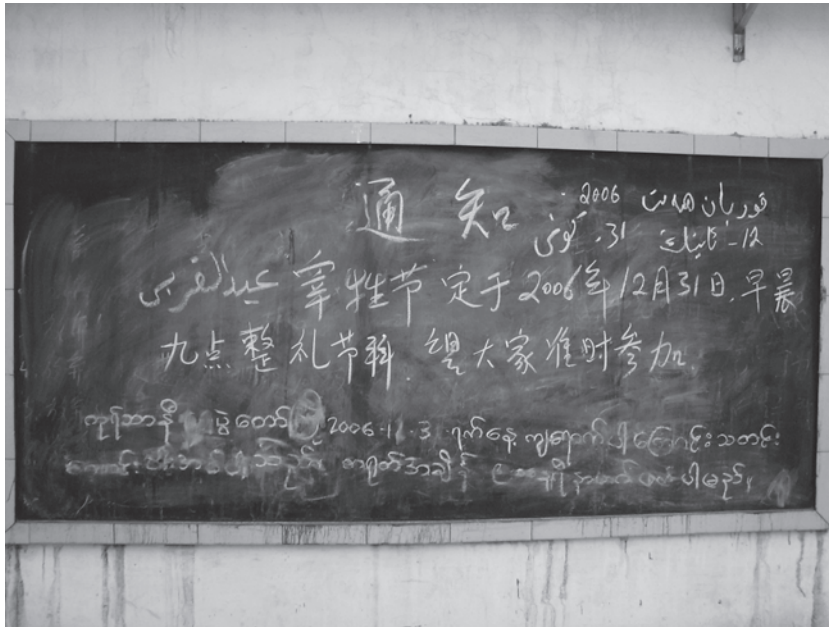


写真 5 中国語とビルマ語両方を用いて、犠牲祭の開催時間を知らせる。



写真 4 瑞麗モスクの入り口。ビルマ語で「シェエリー・バリ」と書かれている。



写真 6 ビルマ語で犠牲祭開催時間を知らせる。中国時間 9 時, ビルマ時間 7 時半と書かれている。

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

だ。雲南省昭通のアラビア語学校を卒業すると、いくつかのモスクの教長職を経て、老馬寨モスクの教長として赴任してきたのである。

老馬寨が属する隴川県内で、今日政府公認のモスクとして認められているのは、唯一老馬寨モスクのみである。老馬寨には2006年12月時点で30数戸の人が戸籍登録しているが、そのうち回族が22戸、残りが漢族である。ただし、回族人口のうち、今日でも老馬寨に居住しているのは10数戸に過ぎない。老馬寨モスクは文化大革命のさなか、1968年に破壊された。その後1990年代に至るまでモスクは再建されず、回族たちも独力でイスラームについて学習せざるしかなかった。1995年にモスクが再建されたが、その際には雲南省宗教局や民族宗教局などの政府機関に加え、ミャンマー華僑ムスリムからも寄付がなされている。

30年近くモスクが存在していなかったため、馬小軍教長が老馬寨に着任した頃は村の人々のイスラームに対する態度はあまりよくなかった。そのため馬小軍教長が一軒一軒家庭を回って、宣教活動に努めた。また、老馬寨では教長による宣教活動の他に、ミャンマーのムスリムたちがダアワ活動に訪れることもある。ダアワとはもともとイスラームへの呼びかけや布教を意味するアラビア語である。近代以降のイスラーム復興の流れの中で、ムスリムに対する宣教活動として世界各地で展開されている。インドを発祥の地とする「タブリーグ・ダアワ」の活動が非常に有名であるが、老馬寨に宣教に訪れるミャンマーのムスリムたちが、「タブリーグ・ダアワ」と直接関係しているのかどうかは分からない。

馬小軍教長の話によると、老馬寨にダアワ活動に来るミャンマー人ムスリムたちは経済的にかなり裕福で、生活に余裕のあるものが多く、食事などはモスク側が提供するのではなく、ダアワ活動を行う人たちが自ら準備する。1か月に三日間宣教にやってくるが、まずモスクにやってきてそこで寝泊まりする。朝と夜の2回各家庭を回り宣教活動を行う。村落内の年配の者たちの中には、こうしたミャンマー人ムスリムによるダアワ活動そのものを受け入れられない人もいるが、若い人たちは比較的受け入れている。ミャンマー人ムスリムたちのダアワ活動により村民のイスラームの信仰が一部回復した部分もあり、一定の作用を生んでいる。加えて、老馬寨にダアワ活動をしに来るムスリムたちは、瑞麗モスクのミャンマー人ムスリム組織と関係している。瑞麗のモスクにダアワ・グループがあり、ダアワ活動に向かう人と向かう先を決めている。

③沙甸における非中国人ムスリムの供犠用ヤギ

2006年12月31日の犠牲祭は、沙甸で迎えた。沙甸の犠牲祭は町全体の回族男性たちが丘の上の沙甸事件を記念する広場に集合し、集団礼拝を行う。沙甸事件とは、1975年7月に沙甸で起こった、中国共産党による回族虐殺事件である。文化大革命中、雲南省革命委員会側が回族に対して侮辱的行為を行ったことが発端となり、回族による武力抗争が始まったが、それを人民解放軍が武力弾圧し、沙甸だけで900人以上の回族が殺害された（松本

1997)。沙甸の犠牲祭では、回族男性たちがこの事件を記念する広場に集まり、集団礼拝を行う。

まず早朝に各モスクのイスラーム学生たちが、^{アホン}阿訇らを先頭に記念広場に向けて歩き出す。沙甸の町から丘の上の記念広場まで至る道は、ムスリムで埋め尽くされる(写真7)。沙甸回族の男性が沙甸事件の記念広場に集合すると、広場において犠牲祭の集団礼拝が始まった(写真8)。

集団礼拝を終えた沙甸回族の男性たちは、それぞれモスクに行ったり、家に帰ったりして、犠牲となる家畜を屠る。私たちは沙甸大モスクに行き、そこでモスクの回族たちが家畜を屠る様子を観察することになる。沙甸大モスクで屠られる家畜はヤギとヒツジである。

ムスリムが家畜を屠る時はいつも同じであるが、沙甸の犠牲祭においても、まずコーランの章句を読んで、その後家畜の喉をかき切り、頸動脈から血液が抜けるのを待つ解体する。

ところで、沙甸の犠牲祭ではこうして家畜を屠る前に、家畜1頭ごとにネームプレートとともに家畜の写真を撮る(写真9)。最初これが何を意味しているのか分からなかったし、今でもはっきりとは分かっていない。沙甸の大モスクの現場で私たちはそうした撮影が何を意味しているのかをしきりに聞いたのだが、彼ら回族たちはそれらの家畜がどこから来ているのか、家畜と共に写真に収められているプレートの名前の人物は誰なのか、写真に残して何をするのかなど、一切答えてはくれなかった。ただ、家畜と共に写真に収められているプレートの人物の名前は、明らかに中国人ではない。たとえば「ALLAHYARHAM OTHMAN BIN JENI」などと書かれた名前が見られ、どうも中国系ではないムスリムが、中国のモスクに寄進しているようである。後に調査同行者に聞いた話では、海外から家畜の寄進が数多く行われており、その寄進者の名前とともに家畜を写真に収め、確かに屠ったという記録として残すのだそうである。ここにも民族や国の境界を越えて結びつく、ムスリムのネットワークが存在している。

2.3 「境界域」上の雲南ムスリム

先にもふれたが、境界そのものは制度や観念によって常に構築され、再構築されるものであって、元来相互に排他的な文化や民族などを前提とすることはできない。調査旅行を整理



写真7 沙甸事件を記念する広場に向かって、回族たちが丘を登る。

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態



写真 8 犠牲祭の集団礼拝。



写真 9 中国人ではない人物の名前が書かれたプレートとともに、犠牲用のヤギの写真を撮影する。

しなおしただけの本稿では、境界そのものを十分に論じるだけの紙幅はないし、そもそも私にはそんな能力もない。ただし、境界が構築され、再構築されるものであって、境界が私たちの思考の前提としてあるわけではないという点は強調してもよいだろう。よって、私たちが始めねばならないのは、純粋な文化や宗教を想定して、その接触を議論するのではなく、むしろ境界上で生じている複雑で、異種混濁的な動態を描き出すことである。

松本光太郎先生と私が行った調査旅行にも、境界が溢れていた。国境、民族や国籍の違い、宗教の差、経済的な格差、ジェンダーの差異など意味も性質も異なる多様な境界とそれを越える人々の動きに、私たちは訪問する先々で出会っていた。おそらくはいずれの境界も、排他的な存在としての境界線の存在が問題となるのではなく、もっと緩やかな境界領域において生じているムスリムたちの相互作用の性質そのものが議論されるべき課題となるだろう。

華僑ムスリムたちは、今日でも雲南省の回族たちと密接な紐帯を維持している人が少なくない。華僑ムスリムたちは国境を越えて雲南省のモスクやイスラーム学生に経済面での援助をすることで、雲南省側の回族とネットワークを繋ぎ続けると同時に、雲南省におけるイスラーム復興に大きな役割を果たしてきた。また、東南アジア諸国においては受けることの難しい、中国語によるイスラーム教育（とくに女子教育はミャンマーではほとんど見られない）を受けるために、華僑ムスリムたちは中国へ再流入している。

他方、非華僑のムスリムの越境も無視できない規模にある。国境域付近の都市部においては、ミャンマー人ムスリムの人数が回族の人数をはるかに凌いでおり、モスクにおいてもミャンマー人ムスリムとの共存が必要となっている。上述の瑞麗モスクにおいては、断食明けの祭と犠牲祭という二つのイードは、回族とミャンマー人ムスリムが協働で行っているが、その他の祝祭や日常生活実践については、両者が別個に組織を生みだしているようである。また、ミャンマー人ムスリムが回族の貧困地区に対して行っている宣教活動も見逃すことができない。境界領域において生じているムスリムの相互作用は、ときに人々を結びつけ、ときに人々を切断する。境界域上のムスリムたちの動態は、今後中国と近隣諸国との民族や宗教、国籍をめぐる議論のなかで、重要な位置づけにあるのではないだろうか。

おわりに

ここに小さな懐中電灯がある。2007年の1月1日、一人で居残って調査を行う私に、松本光太郎先生がくれたものである。雲南の農村は確かに暗く、夜の小道を歩くとき、松本光太郎先生がくれた懐中電灯が、足元を照らす唯一の明かりであった。

松本光太郎先生と一緒に雲南を調査したのは、私の台湾滞在中と一緒に台湾中壢のモスクを訪問した1日を除いて、この時が最初で、最後であった。旅路の記憶と記録は、今日に至るまで本棚にしまい込んだままだった。ここにフィールドノートを開いてみると、私の現在

「境界」をめぐる中国ムスリムの動態

のアイデアを構成するストーリーが、いくつも記されているのに気づく。記憶を呼び起こし、記録を読み返さずとも、その後の私の3年間の思考は、この時の旅路に無意識に規定されていた。松本光太郎先生と私が一緒に行った調査旅行は、私の足元を照らす懐中電灯なのかもしれない。

注—————

- 1) 台湾の中国ムスリムについての詳細は拙稿(2009a)を参照のこと。
- 2) 2006年末当時、馬家寨には48戸、250人の回族が居住していた。馬、明、閃、張姓のものが多く居住している。
- 3) 瑞麗モスクも畹町モスク同様、実際には政府にモスクとして認可されておらず、そのため正式にはモスクではなく「伊斯蘭服務站」と呼ばれている。

参考文献

木村自

2009a「台湾回民のエスニシティと宗教——中華民国の主体から台湾の移民へ」『国立民族学博物館調査報告書(SER)』83, 69-88。

2009b「中国雲南省における経堂教育——魏山県永建鎮を中心に」関西大学文化交渉学教育研究拠点紀要『文化交渉学研究』第2号, 245-258。

松本光太郎

1997「回族は恐ろしいか?——雲南における回族の問題の背景にあるもの」『コミュニケーション科学』(東京経済大学コミュニケーション学会)6:119-136。

2001「イスラーム地域としての中国とタイ(1)——タイ北部雲南系ムスリム調査報告」『コミュニケーション科学』(東京経済大学コミュニケーション学会)14:173-210。

2002a「回族の漢字的イスラームの世界」青木保他編『アジア新世紀3アイデンティティ』岩波書店, 101-113。

2002b「雲南ムスリムとその移住——ミャンマーとタイ北部における伝統の再編」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造——アジア太平洋の底流』弘文堂, 265-293。

2007「中国雲南省新平県における『彝回』について——食習慣の変化とイスラーム復興」『コミュニケーション科学』(東京経済大学コミュニケーション学会)26:39-49。